

武蔵野日曜集会

イエスの霊力

――ヨハネ伝6章1～21節――

1994年9月18日

小池辰雄

癒しの徴 キリストと同質な霊力をいただく エン・クリスト 根源現実 「我なり、懼るな」
棄身の愛 同時に力を受ける

【ヨハネ6:1～21】

1 この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリヤの海の彼方^{かなた}にゆき給えば、
2 大なる群衆これに従う、これは病みたる者に行いたまえる徴を見し故なり。
3 イエス、山に登りて、弟子たちと共にそこに座し給う。4 時はユダヤ人の祭
なる過越^{すざこし}に近し。5 イエス眼をあげて大なる群衆のきたるを見てピリポに言い
給う『われら何処^{いずこ}よりパンを買い、此の人々に食わすべきか』6 かく言い給
うはピリポを試むるために、自ら為さんとする事を知り給うなり。7 ピリポ
答えて言う『二百デナリのパンありとも、人々すこしずつ受くるになお足らじ』
8 弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う『ここに一人の童子^{わらべ}
あり、大麦のパン五つと小き肴^{さかな}二つとをもち、然れど此の多くの人には何
にか為らん』10 イエス言いたもう『人々を坐せしめよ』その処に多くの草あ
りて人々坐せしが、その数おおよそ五千人なりき。11 ここにイエス、パンを
取りて謝し、坐したる人々に分ちあたえ、また肴^{さかな}をも然^{しか}なして、その欲する
ほど与え給う。12 人々の飽きたるのち弟子たちに言いたもう『廃^{すた}るものな
きように擘^さきたる余をあつめよ』13 すなわち集めたるに、五つの大麦のパン
の擘きたるを食いしもの余、十二の筐^{かご}に満ちたり。14 人々その為し給いし
徴を見ていう『実にこれは世に来るべき預言者なり』
15 イエス彼らが来りて己をとらえ、王となさんとするを知り、復^{また}ひとりに
て山に遁^{のが}れたもう。

16 夕になりて弟子たち海にくだり、17 船にのり海を渡りて、カペナウムに
往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまわず。18 大風ふきて
海ややに荒出づ。19 かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、
船に近づき給うを見て懼れたれば、20 イエス言いたもう『我なり、懼^{おそ}るな』
21 すなわちイエスを船に歡迎しに、船は直ちに往かんとする地に著^つけり。



●癒しの徴

『イエスの霊力』という題にしました。このヨハネ伝の6章の1節から15節は——マタイ伝14章15節以下、マルコ伝6章31節以下、ルカ伝9章10節以下に——四つの福音書のどれにも書いてある。キリストの特に素晴らしい霊的力の現れです。こういうのを読むと、もう降参しますよ。キリストというのは大変な方ですね、全く例外的な方です。

1 この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリアの海の彼方にゆき給えば、

「ガリラヤ湖」というのは、ユダヤ人が普通云う言い方です。「テベリア湖」とは特に異邦人に対して云う言い方で、そういう二つの言い方がある。我々はいつも「ガリラヤ湖」と言っていますけれども。この湖の長さは21キロ、幅は12キロあって、地中海の海面よりも21メートルも低い。魚はたくさんいます。私もガリラヤ湖に舟を浮かべて真ん中くらいまで行つた覚えがある。キリストの頃は漁夫もたくさんいたけれども、今はないですね。ヨハネ伝でだけ「テベリア湖」という言い方をしていますが、他の共観福音書では「テベリア湖」という言い方をしないで、みな「ガリラヤ湖」です。特にヨハネ伝は異邦人に伝える面があつたとみえます。「テベリア」という名前のローマの王様がいたんです、その頃はローマの支配下でしたから。「海の彼方」とはガリラヤ湖の東北の方の海岸で、ベツサイダの近くにある(ルカ9・10)。

2 大なる群衆これに従う、これは病みたる者に行いたまえる徴を見し故なり。

みな癒されたものだから、ついてきた。「徴を見た」とはそのことです。誰でもキリストに按手されると、みな治つてしまう。あるいは、言葉だけで治す場合もある。しかも、完了形で、

「汝、癒されたり」

なんて言つてね。まあ、大変なひとです。

3 イエス、山に登りて、弟子たちと共にそこに座し給う。4 時はユダヤ人の祭なる過越に近し。

「過越」という言葉は出エジプトの故事からきている。

「エホバ、エジプトの国にてモーセとアロンに告げていたまひけるは、
2 此月を汝らの月の首となせ、汝らは是を年の正月となすべし。3 汝等イスラエルの全会衆に告げて言うべし。此月の十日に家の父たる者おのおの羔羊を取るべし……、5 汝らの羔羊は疵なき当歳の牡なるべし。汝等綿羊あるいは山羊の中よりこれを取るべし。6 而して此月の十四日まで之を守りおきイスラエルの会衆みな薄暮に之を屠り、7 その血をとりてその之を食う家の門口の両旁の柱と鴨居に塗るべし。8 而して此夜その肉を火に焼きて食ひ又酔いれぬパンに苦菜をそえて食うべし。…… 11 なんじらく此を食うべし即ち腰をひきかけらげ足に靴を穿き手に杖をとりて急ぎて之を食うべし、これエホバの過越節



なり。¹² この夜われエジプトの国を巡りて人と畜とを誦ずエジプトの国の中の長子たる者を尽く撃殺し又エジプトの諸の神に罰をこうむらせん。我はエホバなり。¹³ その血なんじらが居るところの家にありて汝等のために記号とならん。我血を見る時なんじらを逾越すべし。又わがエジプトの国を撃つ時災なんじらに降りて滅ぼすことなるべし。¹⁴ 汝らこの日を記念えてエホバの節期となし世々これを祝うべし、汝等之を常例となして祝うべし。」(出エジプト12・1～14)

「逾越」は英語でいうと「パス・オーバー」ということで、ヘブライ語で「パスツハ」という。「逾越の祭」とはおもしろい事をいうものだね。

「災なんじらに降りて滅ぼすことなるべし」

と、災いがこない。神さまが逾越してやる。そうでないものはみな神さまに罰せられるということです。要するに、災いから逃してやるという気持の「逾越の祭」という、妙なものです。

●キリストと同質な霊力をいただく

⁵ イエス眼をあげて大なる群衆のきたるを見てピリポに言い給う『われら何処よりパンを買いて、此の人々に食わすべきか』⁶ かく言い給うはピリポを試むるために、自ら為さんとする事を知り給うなり。⁷ ピリポ答えて言う『二百デナリのパンありとも、人々すこしずつ受くるになお足らじ』⁸ 弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う『ここに一人の童子あり、大麦のパン五つと小さき肴二つとをもてり、然れど此の多くの人には何にか為らん』¹⁰ イエス言いたもう『人々を坐せしめよ』その処に多くの草ありて人々坐せしが、その数おおよそ五千人なりき。

五千人もいたとは大変なものだな。弟子たちはパンがとても足りないと思ったら、そんなことはキリストは問題にしない。

¹¹ ここにイエス、パンを取りて謝し、坐したる人々に分ちあたえ、また肴をも然なして、その欲するほど与え給う。¹² 人々の飽きたるのち弟子たちに言いたもう『廃るもののなきように擘きたる余をあつめよ』¹³ すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの擘きたるを食いしもの余、十二の筐に満ちたり。

とても考えられないことです。何でもないように書いてあるが、これは大変なことだ。

¹⁴ 人々その為し給いし徴を見ていう『実にこれは世に来るべき預言者なり』

「預言者」とは別な言葉でいうと「メシヤ」のことです。「救い主」です。けれども、この「メシヤ」という言葉は政治的な気持があつて、ローマに逆らつてイスラエルを独立させるといふ政治的な気持をもっている。民衆はキリストを大変な政治的な英雄だと思つたわけだ。



キリストはそんなこととは全然違った次元の考えを――魂の救いのことです――もっていた。

15 イエス彼らが来りて己をとらえ、王となさんとするを知り、復またひとりにて山に遁のがれたもう。

イエスは、

「自分の不思議な力を現したのはそういう事ではない、そんな王様ではない、魂の世界のメシヤだ」

というわけです。霊的な生命を具体的な事実をもつてキリストは現した。問題は、パンの問題ではない。魂のパンの問題なんだ。ところが、民衆はキリストを具体的に非常に力のある王者だと言って、王者にしようと思った。だから、キリストは山へ逃げて行ってしまった。「全然その内容が違うんだ」というわけです。

我々も、キリストの霊的な力と同質なものを、キリストと同質な霊力を、我々キリスト者が持たなければ、本当のキリスト者ではない。霊的なキリストの力を、キリストを宿すことによって持つことが大事なわけです。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

とパウロが言った。パウロは正にそのような使徒であった。我々もパウロと同じようにキリストの霊的な力をいただかなければ、本当はキリスト者ではない。

●エン・クリスト

大事なのはローマ書8章です。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。²キリスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法は、なんじを罪と死との法より解放ときしたればなり。」(ロマ8:1～2)

2節の、

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法」

とは大事な言葉です。生命の源泉がこの聖霊ですから。キリストの聖霊、その法則は

「なんじを罪と死との法より解放した」

と。本当にキリストと魂が交わりの世界に入ると、我々の相対的な人間がどうであるかということは問題でない。

「³肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり」

「肉」とは我執のことです。生まれつきの自分を肯定することを肉という。「霊」というのは、キリストに在る在り方が霊なんです。キリストの御霊にあつて在る在り方が「霊」で、生まれつきの自分というものが在るのが「肉」です。

我々は霊肉渾然たるものです。渾然はいいけれども、混然はダメなんだ。本当に霊的に



自分に死んでキリストと、一つになったら、こっちの渾然なんだ。ところが、霊もあるけれどもまた生まれつきの自分もあるというのは混然の方だ。「キリストに在りて」というときには渾然の方なんだ。

「キリストに在る者は罪に定められることなし」

とパウロが言っているのは渾然の方だ。キリストの生命を生命としている。我々はそういう二重構造になっているんだけど、これは仕方がない。

信じ仰ぐ「信仰」なんてものは要らない。私は、

「信仰なんてありません、キリストの中に自分を投げ入れてます」

と言う。こっちの渾然です。キリストの中に自分を投げ入れる。

「われキリストの中に。キリストわが中に」

とパウロが言った。あれがこの渾然の方です。

信仰という言葉がどうもまだるっこくて、私は嫌いになってしまった。だから、私が言っている「エン・クリスト」「キリストの中に」という、この「中」が大事なんです。外側ではダメなんだ。イン・クライストです。ドイツ語の「インアイナンドル」という内的関係です。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

というのは内的相関関係です。パウロが言っている現実がそれです。これが本当の「信交」の現実です。エン・クリストです。これが我々の存在の、実存の根本性格なら非常にいいわけです。また、そうでなければならぬわけです。人間は混然たることは正直、現実です。これが現実だけれども、しかし、その中心はこっちの渾然なんです。そういう二重構造になっている。仕方がない。エン・クリストが根底の現実——根源現実、というかね——これが根源現実になっていけば、それでいいわけです。「エン・クリスト」「キリストの中に」ある。それが本当の信交の現実なんだ。どうせ、地上においては矛盾構造になっています——矛盾という言葉はあまり好きではないけれども——少し混然たる所がありますけれども、しかし、根底の、根源の現実、エン・クリスト、キリストの中にです。だから、ゆるまない。いわゆる信仰ではない。もっと現実です。現の世界、霊的現実です。根源現実、霊的現実、と言ってもいい。霊とは聖霊のことです。御霊にあつての現実です。パウロがローマ書8章で、「キリストに在る者は」と言っているのがこれです。

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり」

と。このローマ書8章2節は大事な言葉です。

●根源現実

「³肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子



を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。」(ロマ8:3)

「肉によりて」とは、我執という肉によつてということ。「罪のために」とは、罪を滅ぼさんがためにということ。「罪を定めたまえり」とは、罪を罰として定めた、ということです。

これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完^{まこと}うせられん為なり。

モーセの律法が示しているところの義は、聖霊が来なければ全うできない。ところが、ユダヤ人は、聖霊なしにそれができると思つて、やっているわけだ。ご苦労さんな話だ。くたびれてしまう。

霊的現実、根源現実、これが「エン・クリスト」です。これが、とにかく、私たちの生活の主導権をにぎっているならば、主なる性格であるならば、それがいいし、また、そうでなければならぬ。本当のクリスチャンというものはそういうものだ。

「キリストが神の子であることを信じている」

ということではない。そんな事柄を信じているのではない。キリストと一つとなつているその現実。それが根源現実、あるいは霊的現実となつていること、これが大事なことです。信仰ではない。現実です。

ところが、普通のクリスチャンはこの信仰なんだ、

「信仰、信仰」

と言っている。

「信仰が大事だ。自分の信仰がどうだ」

と、自分の信仰なんか考えている。それではくたびれてしまう。今、私が告白しているような現実、普通のクリスチャンは持つていない。だから、力が来ない。この現実に入ると、もの凄い力がくる。そして楽しい。楽でしようがない。楽で、力があつて、楽しくてしようがない。

ヨハネ伝を見ても、キリストというひとは大変なひとだ。水を葡萄酒にしたり。それはもう考えられないね、大変なひとと言うよりかしようがない。

「どれだけあるか」

なんてことは問題にならない。いくらでも創造してしまう。

とにかく、キリストの霊的な力を、霊力を質的にもたないと、本当はクリスチャンではないんだ、同質にならないと。神さまがアダムを造ったときに、

「神の姿に似せて、」

と書いてあるが、あれは「似せて」ではない。

「神の姿に即して、」

と訳さなければいけない。「似姿」ではない。私たちは神の姿に即して造られた。だから、私たちは神の霊が止ま^{とど}まっている霊止^{ひと}です。

「たましひ」は「魂之霊」と書く。「霊」は「ひ」と読む。「たましい」ではなく、「たまし



ひ」と書かなくてはいけない。

●「我なり、懼るな」

ヨハネ伝にもどります。

16 夕になりて弟子たち海にくだり、¹⁷ 船にのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたるに、イエス未だ来りたまわず。¹⁸ 大風ふきて海ややに荒出づ。¹⁹ かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給うを見て懼れたれば、

「何だ、これは怪しいな」

と、何か幽霊かと思つて恐れた。

20 イエス言いたもう『我なり、懼るな』²¹ すなわちイエスを船に歓び迎えしに、船は直ちに往かんとする地に著けり。

このキリストの、

「我なり、懼るな」

という言葉が大事です。私たちは日常生活で、「我なり、懼るな」というこのキリストの言葉を聞かなくてはいいかん。歓び迎えると、船は直ちに往かんとする地に着く。

「何もこわがることはない。私だよ」

という、キリストのこの霊的な力ある声を聞かなくては。その瞬間に直ちに力が来てしまう。「我なり、懼るな」というキリストのこの声を聞いて、直ちに力をいただく。それでなければ、本当に聞いたことにならない。聞き入れるという言葉があるけれども、キリストを入ねなくてはいいかん。

「我なり、懼るな」

ということとは、言葉はそうだけれども、「こわがるな」ということではない。

「恐れなき世界にいられてやるぞ」

ということでは

「私だぞ。私を受けとれば、恐れなき世界に入ってしまうぞ」

ということでは。恐れる恐れはないという、こちら側の心理状態ではない。

「私を受けとつていれば、恐れなき世界に入ったことになるぞ」

と。何がきても、一向差し支えない。相手の方が恐れてしまう。相手がびつくりして、相手がこわがる。

「我なり、懼るな」

と、この一言でいい。何もこわいことはない。楽しくてしょうがない。楽でしょうがないということでは。



●棄身の愛

何でも、一如の世界にならなければダメです、一つの世界に。ドイツ語で「フェルアイニゲン」「一つにする」という言葉がある。一つとなること。本当の霊的現実はこの一如の世界です。

「我がキリストか、キリストが我か」

という世界です。キリストと二分していない。別な言葉で言うと、

「キリストの中に自分の姿が消えてしまっている、キリストの中に入ってしまったっている。キリストの方から、キリストがくだって来て入ってくたさる」

と。これが本当の言い方です。本願の力だから。「本願」とはいい言葉だね。

「弥陀の本願の効力」

という。上からの願い、本願です。こちら側からのお願いではない。上からの本願が、

「われ汝を愛す」

というキリストの言葉です。

「わが愛に居れ。お前が私を愛したのではない、私がお前を愛している」

という。それを反射するのが、我々がキリストを愛するということ。これはヨハネ書翰の中にも書いてある。ヨハネ第一書3章16節、

「主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、

我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」(ヨハネ一3・16)

愛するとは、己を献げることだね。これは棄身だ。これが本当の棄身の愛ということだ。「棄身」とはいい言葉だ。自分をその人のために棄てる、それが棄身の愛です。棄身の愛が本当の愛です。マグダレーナがキリストにナルドの香油を注ぐときに彼女はその壺を割った。壺を割って、

「このナルドの香油は全部あなたに注ぎます」

と。あれが本当の全身の愛なんです。だから、マグダラのマリヤは全身をもってキリストを愛した。壺を割ったというのはそういう意味です。棄身の態勢なんです。だから、キリストは非常に喜んで、

「この女のしたことは福音の伝えられる所にまた語られる」と言われた。

「福音の伝わる時には、このマグダラのマリヤが自分に注いだこの行為はまた語り伝えられる」

と。これはキリストが言ったのだから、しょうがない。それが棄身の愛なんです。壺を割ったということは自分を棄てたということです。

「主われを愛す」という讃美歌(461)があるね。あれは正にそういう愛なんです。キリストが我らのために生命を棄てた。生命を棄てたというのは、生命を私たちに与えたという



ことです。どこか他に棄てたのではない。

●同時に力を受ける

讃美歌を歌ったら、同時に力を受けてなければしょうがないよ。力を受けてなければ、本当は歌っていることにならない。そうすると、あなた方は自分のしている仕事に力が入ってくるから。何をしても、力が入ってくる。それが本当の現実です。それは霊的現実の秘訣です。だから、疲れない。力が来てしょうがない。ありがたくてしょうがない。夜、寝るときには床の上に端坐して、

「主さま、ありがとうございます」

と言って主の前に平伏す。そうしたら、何があるかと、安眠できる。何も考えない。どんな問題があるかと、そんなことはもう問題にしない。

イギリスのグラッドストーンはそういう人だった。いろいろな難しい問題があっても、彼は本当に寝る時にはキリストに平伏したから、どんな事があっても彼は眠ったという。ゴルドン将軍がアフリカのカーツームで最後は戦死しますが、その苦境をグラッドストーンも知っている。もちろん、援軍を出しておいた。けれども、彼は本当にキリストに因り頼んでいたから、心配はしない。

19 かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上をあゆみ、船に近づき給う
を見て懼れたれば

海の上を歩いてくるんだから、イエスというのは大変なひとだね。キリストの歩き方は水の上になんか触っていないですよ。こんな事のできる人は他にいない。何でもないように淡々と書いている。

「驚くべきことに、海の上を……」

なんて書いてない。ただ「海の上を歩いた」と書いてある。いわゆる物理法則になんかに支配されない。これは霊的法則で動いている。正に霊法で動いている。

「生命の御霊の法」

で動いている。パウロがローマ書8章で言っているとおり、正に「生命の御霊の法」なんです。そういった質が、霊法が、生命の御霊の法というものが、私たちの在り方の根底に、中心に、とにかく動いていれば、これは凄いことになる。創造的な事も浮かんでくるし、何か業^{わざ}をしても、特別な素晴らしい業が出てくる。あなた方、お一人お一人がそれぞれの在り方や仕事でもって質的にみな同質的なものが動いていく。

「一枚の最後に残ったこの衣 神の為には猶脱がんとぞ思ふ」(賀川豊彦)
賀川さんもそういう人だね。

